第五章　白き聖獣ファーナ

――二年後。

遠雷が鳴っていた。

雲間からは薄日が射していて空はまだじゅうぶんに明るく、一雨きそうな雰囲気など、その風景からは微塵も感じられなかった。

しかし、ミアネージュは肌に感じる空気がしだいに湿り気を帯びたものに変わってきていることに気がついていた。

「そろそろ来るかも……」

天をふり仰ぎ、ミアネージュがつぶやいた。

天然の石舞台といった趣のある巨大な岩塊を背にして、彼女は立っている。

目の前の大地は、ほんの数百メートルのところで断崖となっていて、群青の海がその絶壁の下に待ち受けているはずだった。だが、いまは凪なのか、波音はあまりにも静かで、ここまではとどいていない。

遠くで鳴っていた雷鳴が、徐々に近づいてくるにしたがって、稲妻がはっきりと目につくようになる。

乾いた大地の上で木刀を手に対峙しているふたりは、先ほどから彫像のように挙措を止め、ぴくりとも動こうとしない。

巨大な積乱雲が空のすべてを覆いつくし、風が渦を巻きはじめた。

あらゆる魔法を禁じ手とした剣技のみでの戦いは、静寂を友とする。

双方ともに隙がなく、張りつめた空気が離れた位置にいるミアネージュにも、はっきりと感じとれるほどだった。

やがて、にわかに空がかき曇り、雨が降り始めた。

ぽつ、ぽつと、最初は遠慮がちにあちこちの地面を叩いていた雨が、またたくまに本降りとなる。

乾いた地面を雨粒が叩くことによって細かな塵が舞い上がるのか、ほこりっぽい匂いが鼻をつく。

降りだした雨は、容赦なく対峙しているふたりのからだを叩いている。

それが試合を見守る者の礼儀だと思ったのか、雷雨に打たれてもミアネージュは結界を張ろうとはしなかった。たとえ、淡い金色の髪が雨を吸ってその重さを増し、白いサマードレスが肌にぴったりとくっついて、からだのラインをさらしても。

轟音と呼んでもいいような、激しい雨の音があたりの大気を圧して響き、すべての音をかき消していく。

雷光が走った。

目も眩(くら)むほどの光が、大地の上に己(おの)が影を映しだす。

勝負はその一瞬に始まり、そして終わった。

水を跳ね上げ、袴姿の少女が大地の上に片膝をついてしゃがみ込んだ。

苦痛に顔をしかめ、右腕を押さえている。

ふり返り、レグルスが言った。

激しい雨音に声がかき消されることを考慮に入れ、思念波も送る。

『ごめん、加減できなかった』

『へいき、このくらい』

リリカは顔を上げ、微笑んだ。雨に体温を奪われ、蒼白(そうはく)といってもいいほどだったその顔に、ほんのりと赤みがさす。

レグルスは、それ以上リリカが濡れないよう、結界を張って雨よけをつくった。

『それより……レグルス、勝負してくれてありがとう』

『えっ？』

『ううん、なんでもない』

言って、リリカが立ち上がる。

「リリカ、だいじょうぶ？」

ミアネージュが駆け寄ってくる。

レグルスが張った結界の中に入り込み、リリカの前に立つ。

「ちょっと、見せて？」

「あ、うん……」

いつになく、素直に応じるリリカ。

ミアネージュがそっとリリカの腕をとり、具合を確かめる。

ややあって。

「折れてはいないみたい」
「え、うそ？」
意外といった感じで、リリカが聞き返す。
「リリカの骨って、普通の人よりかなり丈夫にできてるみたいね」
「リリカは魚好きだからな。それに人の何倍も鍛錬してるから、筋繊維だけじゃなく骨密度も高いんだろ」
レグルスの言葉に、ミアネージュがうなずく。
「あ、そうそう、きっとそうよ」
「それって、よろこんでいいことなの？」
「もちろん」
にこっと微笑み、ミアネージュが答えた。
「でも、体重があるってことにならない？」
レグルスの視線をそれとなく気にしながら、リリカが言う。
「大切なのは、体重そのものより、見た目よ。リリカは、どっちかっていうとスレンダーなほうだし、スタイル抜群だと思うけどな」
「そ、そう？」
「うん。あ、それより、いつまでもこんなとこにいたんじゃ風邪ひいちゃう。道場に瞬間移動するわよ。治癒魔法はそのあとでね」
ミアネージュの言葉と共に、三人の姿はその場から忽然と消え去った。

「一〇二五、一〇二六、一〇二七」
木刀が風を切り、唸りを上げる。
道場の中央で、ひとり素振りをしているのはレグルスだった。
ミアネージュとリリカのふたりは、無影流道場名物の大浴場で、のんびり湯に浸かっている。雨で冷えてしまった体を温めているのだろう。
総桧造りの湯船に、採光用の天窓から漏れてくる淡い光が、初夏の今ごろは格別のはずだった。女性専用となっているため、レグルスはその風呂を利用したことはない。いや、正確にはあるのだが、幼い子供のころのことなので、ほとんど憶えていないのだ。男女の人口比に著しい偏りがあるため、門下生の数も圧倒的に女性のほうが多く、このへんは致し方のないところだった。

むろん、男性用の風呂もあることはある。白い濁り湯の露天風呂がそれだ。まあ、冬以外なら気持ちよく入れるので、レグルスもさほど不満を感じてはいなかったが。

「一〇三九、一〇四〇……」

「……」

ふと、あるかないかの微かな息づかいを感じ、素振りをやめてレグルスはふりむいた。

「……ファンネリア？」

驚いて声を上げる。

そこに立っていたのは、白い巫女服に身をつつんだ可憐な少女、ファンネリアだった。ただ、きょうの彼女は髪を下ろしているので、いつもの大人びた雰囲気はない。

「こんにちは、レグルスさん。ごきげんいかがですか？」

にっこり微笑んで、ファンネリアが近づいてくる。

「ああ。ファンネリアも元気そうだな」

「はい」

「で、きょうは何？」

「あ、はい……」

ファンネリアは、どう話を切りだしたらいいのかわからないといった感じで、レグルスから視線をはずした。

「その……」

それ以上言葉がでてこない。

いつものファンネリアらしくなかった。

「ファンネリア？」

「……」

呼びかけられ、ファンネリアが上目づかいにレグルスを見る。

澄んだ紫色の瞳が、何かを訴えかけているかのように思われた。

「レグルスさん……」

ファンネリアが囁くように言う。

「あの……」

上気した頬でレグルスをじっと見つめ、何かをためらい、目を伏せる。
まるで恋する乙女といった風情だ。
ファンネリア、もしかして……。
と、レグルスが思ったのも無理からぬことだった。
とつぜん。
レグルスは何も言わなくてもすべてわかってるとでもいうような顔つきで、言った。
「いいよ」
「はい？」
ファンネリアがきょとんとした顔をする。
「あの、わたくし、まだ何も……」
「俺がファンネリアからの誘いを断るわけないじゃないか」
「そ、そうですか」
何か釈然としないものを感じながらも、ファンネリアはうなずくしかなかった。
「で、どこに行く？」
「えっ？　あの、どこにって、どういう……」
まったく話がかみ合わない。
「やっぱり、はじめてのデートなんだから、それなりのとこじゃないとダメだろ？」
「はじめての、デート……？」
しばしの沈黙の後。
板敷きの道場に、ひときわ高いファンネリアの叫声（きょうせい）がこだました。
「ち、ちがいますっ！」
「へっ？」
ファンネリアは耳の先まで真紅に染めて、言い募（つの）った。
「どうしてわたくしがレグルスさんをデートにお誘いしなければならないのですか？」
「いや、どうしてって言われても……」
「あんまりおかしなことおっしゃられても、わたくし、困ります！」
「ううっ……」

返す言葉もなく、レグルスはしゅんとなって首を垂れた。
「ご、ごめん」
「あ……」
言いすぎたと思ったのか、ファンネリアはあわてて言葉を継いだ。
「わたくしには、まだ、ファーナの巫女として、なさねばならないことが残っていますから。あの、お気持ちはうれしいのですが……」
「いや、いいんだ。勝手な思いこみでおかしなこと口走った俺がいけないんだから。それより、何か話があったんじゃ……」
「あ、はい」
ファンネリアがぱちぱちと目を瞬く。どうやら、レグルスの立ち直りの早さに戸惑っているようだった。
ややあって。
「あの……」
ファンネリアはためらいがちに、話を切りだした。
「もうすぐ、ファーナの神殿がもとのように一般の方々にも開放される予定なのですが、レグルスさん、よろしかったら迷宮に挑んで力を試してみませんか？」
「え、ほんとに？　ほんとに再開されるの？」
「はっ、はい……」
「よしっ！」
レグルスは気合いを込め、ぐっと拳を握りしめた。
「あの、レグルスさんはこの二年間、くる日もくる日も鍛錬に励み、地道に精進してこられたようなので、以前よりもずっと強くなられたかと思います。でも、迷宮にひとりで挑むような無謀なまねだけはなさらないでくださいね」
「わかってる。ミアとリリカのふたりを誘って三人で挑戦するから、心配しないでくれ」
「三人で、ですか」
ファンネリアはレグルスにというより、むしろ自分自身を納得させようとしているかのようにつぶやいた。
「ミアネージュさんたちが同行してくださるのでしたら、もしかしたら、なんとかなるかもしれませんね……ですが……」

「……」
ファンネリアはすでにリリカと面識があり、その実力もじゅうぶん理解したうえでの呟きだっただけに、レグルスが不安にかられたのも無理はなかった。
そのとき。
「ふうっ、いいお湯だった」
「ほんと、レグルスの家のお風呂って最高ね」
そんな会話をしながら、お風呂から上がったリリカとミアネージュのふたりが、鳳凰の焼絵のある杉戸を開けて道場に入ってきた。
ふたりとも涼しげなゆかた姿で、甘い香りのする洗い髪を背中へと流している。
「レグルス、いまならだれもいないから入ってくれれば？」
レグルスの姿を認めたミアネージュが、いたずらっぽく笑って言う。
レグルスはちらっとリリカのほうを見て、答えた。
「そうしたいのはやまやまだけど、あとからだれか入ってくるかもしれないし、なんか睨まれてるような気もするからやめとくよ」
「もうっ、どうしてそこであたしを見るのよ！」
リリカが紅唇を尖らせる。
「いや、なんとなく」
「……レグルス、なんにも知らないようだから教えてあげるけど」
つかのまためらったのち、リリカが口を切った。
「あのお風呂にはのぞき防止用の罠がしかけてあるから、近づかないほうがいいわよ」
「覗き防止って、俺はべつに……」
「ばかね、男の人が近づいただけで発動するような魔法のトラップなの！」
「そ、そんなものがほんとにしかけてあったのか？」
「あーっ、その態度、思いっきり怪しい。もしかしてレグルス、過去にのぞきを企てたことあるんじゃないの？」
「な、なに言ってんだよ、人聞きのわるい。ファンネリアが変な誤解したらどうするんだ？」
「あら……」
ふたりは、そのときになって初めてファンネリアの存在に気づいたようだった。

「あ、ファンネリア、来てたんだ。いつもとちがって髪を下ろしてるから、気がつかなかったわ」
ミアネージュはふわっと宙に浮き上がり、ファンネリアの正面へとまわりこんだ。
「おかしいですか？」
「ううん、そのほうが女の子っぽいし、ファンネリアらしくて絶対いいと思うよ。ね、リリカ」
「うん。でも、ファンネリアはとびっきりの美人だから、どんな髪型にしても似合っちゃうと思うけど」
レグルスの横にならんで立ち、リリカがウインクする。
「そ、そうでしょうか」
ファンネリアはくすぐったそうに微笑んで、ちらっとレグルスの顔をぬすみ見た。が、レグルスは何かほかのことに気を取られているようすで、ファンネリアの視線に気づくことはなかった。むろん、三人の会話の内容など耳に入っているとはとうてい思えない。
ファンネリアが小さくため息をつき、素足の爪先に視線を落とす。
自由な服装を楽しむことのできないファンネリアにとって、唯一ゆるされるおしゃれが髪型をいじってみることだったのだから無理もない。
「相変わらずね、レグルスは……」
ミアネージュが小声でつぶやき、しかたなくリリカがフォローにまわる。いつものパターンではあった。
「ファンネリア、それできょうはどういった用向きなの？　もし魔獣退治かなんかだったら、レグルスじゃなくあたしに頼んでよ。試してみたい新技もあるし、よろこんで引き受けるわよ」

その日、リリカはいつもより早く目が覚めた。
あたりはまだ薄暗く、自身の心臓の鼓動が聞こえてきそうなほど、しんと静まり返っている。
和式の十二畳間。
それがリリカの部屋だった。

といっても、基本的には板敷きで、畳があるのは部屋の中央の部分のみ。そこに布団を敷き、リリカはふだん寝起きしている。

家が衝破翠皇流道場ということもあり、このへんはふつうの女の子の暮らしとだいぶちがうところだ。

部屋には明かりを取り入れるための大きな障子(しょうじ)の窓があり、その反対側の壁には、妖精をモチーフにした淡い色合いのタペストリーが掛かっている。

内装にあわせた和箪笥(わだんす)と大きな姿見があるほかは、家具らしきものが見あたらない。いたってひかえめで質素なところに、大和撫子(やまとなでしこ)を地でいくリリカらしさがよくでているといえた。

「きょうは思いっきり暴れてやるんだから」

リリカはこの日のために用意しておいた、セーラーカラーの白いワンピースにそでを通し、入念に髪をすきはじめた。

いつものように髪の先端をリボンで結んだりせず、ごくナチュラルな感じのするストレートヘアでまとめてみるつもりだった。かわりに、透明な防御用のジェルで髪を含め全身をコートする。

「こんなとこかな」

しなやかで艶のある自慢の黒髪を背中へと流し、つぶやく。

「あとは……」

青い涙滴型(るいてき)のクリスタルをあしらったネックレスで胸を飾り、革の編み上げ靴を取りだして足もとをかためる。

鏡に全身を映し、バランスがとれていることを確認してうなずいた。

すでに、朝食などはすませているのでこれでほぼ仕度は整ったことになる。

ちょうどそのとき。

「リリカ、起きてる?」

窓の外から聞こえてきたのは、ミアネージュの声だ。リリカが障子を開くと、レビテーズで宙に浮いたままにっこり微笑んでいるミアネージュがそこにいた。

リリカの家は平屋なのでとうぜん彼女の部屋も一階――ということになるのだが、目線があわないため宙に浮いているのだ。

窓の外には、朝もやにかすむのどかな田園風景が広がっている。森の中にあるレグルスの道場とは対照的な眺(なが)めだった。

「おはようミア」
「おはよう」
ミアネージュはあいさつを返し、ちょこんと障子の敷居に腰かけた。その拍子に、紅いドレスの裾がふわっと広がり、ひらひらとした白いレースが顔をのぞかせる。
「よく眠れた？」
「うん、まあね」
ミアネージュの問いかけにリリカが笑顔で答える。実際は、気持ちが高ぶっていたせいで熟睡できたわけではなかったのだが。
「待ち合わせの時間まで、まだかなりあるけど、どうする？　上がってお茶でも飲んでく？」
「あ、うん。ありがとう。でも、レグルス、もう待ち合わせ場所で待ってるのよ。だから、リリカさえよければすぐにでも出発できるんだけど……」
ちょっと信じられない、といった表情でリリカが訊く。
「うそでしょ？」
「それがほんとなの。なんかレグルス気合い入りまくりって感じで、一秒でも遅刻したら置いてくとか言ってるし、早めに行ったほうがいいかもよ」
「そう。じゃあ……」
リリカは玄関にまわらず、そのまま窓から外にでた。
そのあとを追ってミアネージュが地面に飛び降りる。と、明障子がするすると自動的に閉まり、窓枠の上の方から格子木が下りてきて連子窓に早変わりする。
「戸締まりは？」
「うん、あれで大丈夫」
ミアネージュがそう言ったほんの数瞬後には、瞬間移動で森の入り口にある開(ひら)けた野原に、ふたりは立っていた。
「まさかとは思うけど……」
レグルスがミアネージュとリリカの姿を目にして、開口一番あびせかけた言葉がそれだった。
「ふたりとも、その格好で行くのか？」
「えっ？　どこかおかしい？」

スカートを右に左に振って自分の服装を確認したあと、きょとんとした顔で、ミアネージュが聞き返す。

黒を基調とした魔剣士ふうのスタイルで決めているレグルスに比べ、たしかにふたりの服装は、これから難易度の高い迷宮に挑むにしては場違いな感じのするものだった。

魔剣士を目指しているリリカの場合は、いま着ている服をベースにショルダーガードやブレストプレートをつければそれなりの格好になるが、ミアネージュの場合はフォローのしようがなかった。

いかにも人目を引きそうな真紅のスカートはフリルいっぱいのキュートなミニ。パフそでの白いブラウス。その胸もとをレースのリボンが飾り、そでの絞りの部分にも小さなリボンがついている。足もとも、ブラウスに合わせて白いレースの靴下をチョイスし、この手の服装にはもはや定番の赤いストラップシューズでしっかり決めている。どこからどう見てもおしゃれいっぱいのデート用の装いで魔導士らしさのかけらもない。

「あたしはべつにかまわないと思うけどな」

と、リリカが言う。

「そうか？」

「うん。だって、こういうカッコしてれば、相手が油断してくれるかも知れないじゃない？」

「……」

レグルスは呆れてものも言えない、といった顔つきでふたりを交互に見やった。

「遊びに行くんじゃないんだぞ？」

「やぁね、わかってるわよ、そんなこと」

言いつつ、ミアネージュがレグルスの胸をぱんぱんと叩く。

「ほら、せっかく早起きしたっていうのに、このままじゃ時間がもったいないじゃない。細かいこと気にしてないでさっさと行きましょ！」

ミアネージュとリリカは風を纏（まと）ってそのまま空へと舞い上がると、光翼疾風（シルフィウィング）で高速飛行にうつった。

「あっ、おい、ちょっとまてよ……」

その場に取り残されたレグルスが慌ててふたりのあとを追う。

「ったく、あいつらスカートのなか丸見えだっていうこと、気づいてるのか？」
燕尾服のような深い切れ込みのあるマントをはためかせて高速飛行しながら、レグルスはつぶやいた。

森はまだ尽きてはいなかったが、樹相はあきらかにその姿を変えつつあった。
天を衝くほどの威容を誇る巨樹が姿を消し、かわりにごくふつうの森で見られるような、ありふれた広葉樹があたりを占めるようになってきていた。ファンネリアから得た情報によれば、そろそろ神殿が見えてきてもおかしくはない頃合いだった。
「飛行魔法で飛べるとこまで飛んで距離をかせいだから、日暮れまえには目的地にたどりつけそうな気配ね」
リリカが隣を歩いているレグルスに言う。
「だといいんだけどな」
レグルスが言葉とともに、後ろをふり返る。
「ま、まってよ、ふたりとも。足、早すぎるよぉ」
ミアネージュが肩で息をしながら小走りにかけてくる。
ふたりは立ち止まってミアネージュが追いつくのを待った。
リリカが腰に手をあて、ため息をついてみせる。
「ミア、運動不足なんじゃない？」
「なっ、体力バカのあんたたちといっしょにしないでよ。わたしは見ての通り、まだまだ成長途中のかよわい女の子なんですからね」
「たっ、体力バカってなによ、体力バカって！　ミアが追いつくまで、わざわざこうして待っててあげてるのに！」
売り言葉に買い言葉。
空腹ゆえ、苛(いら)つきやすくなっていることに気づきもせず、ミアネージュとリリカのふたりは一瞬即発の状況に陥っていた。
「おい、ふたりともやめろよ。もう少しで神殿に……」
諍(いさか)いを止めようとしたレグルスの言葉をさえぎって、リリカが言う。
「レグルスは、腹が立たないの？　体力バカなんて言われて！」
「ミアの口の悪さは、今に始まったことじゃないだろ？　もう少し冷静に……」

ふと、レグルスがことば途中で凍りつく。ミアネージュがワンドを取りだして、構えたからだ。

「ちょっ、ちょっと待て、ミア……」

矛先がかわったことをレグルスは敏感に察知した。

敏感に察知はしたが、いま自分が置かれている危機的状況をどうすることもできない。

「口が悪くてわるかったわね！　どうせわたしは育ちがわるい、お子さま魔導士ですよーだっ！」

言葉とともにミアネージュがワンドを振った。

同時に、リリカが電光石火の疾(はや)さでその場を飛び退き、大木の陰に身を隠す。

そして、レグルスは逃げ遅れた。

「!?」

光の五芒星が大地に軌跡を描き、魔法陣の外縁にそって光のカーテンが立ちのぼった。

瞬間、五芒星の中心に出現し、宙に浮かんでいた赫灼(かくしゃく)のクリスタルが魔炎を喚(よ)び、鉄巨人が姿を現した。

その鉄巨人――いわゆる魔操機兵は、レグルスのゆうに三倍は身の丈があった。鬼神もかくやというほどの偉丈夫だったが、無骨な外見に似合わず、どこか親しみやすさを感じさせるようなところがあり、禍々(まがまが)しさなどは微塵も感じられない。

とっさに大剣を取りだし身構えてはみたものの、襲いかかってくるようなそぶりもなく、レグルスはすぐに構えを解いた。

その鉄巨人はミアネージュの前にひざまずき、意外なほど優雅な動作で一礼したのち、大きな掌(てのひら)を差しだした。

「ミア？」

リリカが木の陰から顔をのぞかせ、目を丸くする。

ミアネージュはリリカの物問いたげな顔に、ちらっと一瞥(いちべつ)をくれただけで無視を決め込むと、鉄巨人の掌に飛び乗った。

「ジーク、行って！」

ジークと呼ばれたその鉄巨人は、ミアネージュの命に従い、彼女をその手の上に乗せたまま歩きだした。

「あーっ、ずるい。ミアばっかりそんなのに乗ってくなんて！」
リリカがあわてて後を追いかけ、走りだす。
ストライドがちがうので、鉄巨人はふつうに歩行していてもかなりのスピードがあり、なかなか追いつけない。
そうこうしているうちにミアネージュが鉄巨人の肩越しにひょこっと顔をだし、子供っぽく舌をだしてみせた。
「ミア、おぼえてなさいよ！」
リリカの最後通告が飛ぶ。
しかし、鉄巨人が動きを止めるような気配はまったくない。
レグルスは、やれやれといった顔でふたりの後を追いはじめた。

しばらく、森の中を進んでいくと、いつのまにかあたりに霧が立ちこめ、極端に視界が悪くなった。
「まいったな」
そうぼやきつつ、レグルスは足を止めた。
はぐれたりしないようにレグルスのマントの端をぎゅっとにぎりしめたまま、後ろをついてきていたリリカが、その背中に鼻先をぶつけ、きゃんと子犬のような声を上げる。
「いったぁ、もうっ！　いきなり立ち止まらないでよ！」
「わるい」
先行していたミアネージュが、ふたりのやりとりを耳にして鉄巨人に止まるよう命令を下す。
「止まって、ジーク」
微かな金属音をたて、鉄巨人が静止した。
リリカが鼻をさすりながらミアネージュに無茶な注文をする。
「ミア、魔法でなんとかならないの？」
「なんとかって言われても、結界が張ってあるから透視は……」
そのときだった。
「きゃっ」
いきなり白い影が疾(はし)り、鈍い衝撃とともに鉄巨人がぐらりと傾いた。

「どうしたミア!?」
声をかけた瞬間、レグルスの脇を何かが走り抜け、ふたたび衝撃音が響いた。
どんっ！
「きゃあ!?」
空中に投げだされ、ミアネージュが悲鳴を上げる。
結界の力が強すぎて、すでにフォーリングコントロールの魔法すら効果がなく、地面に叩きつけられることを覚悟して、ミアネージュはぎゅっと目を閉じた。
が。
「あれ？」
「ったく、世話の焼ける」
「レグルス？」
レグルスが、間一髪のところで抱きとめてくれたのだ。
「あ、えーと」
ごく間近で瞳と瞳が合った。
ミアネージュがとまどいの色を見せる。
こういうシチュエーションは初めての経験だったので、どういうふうに反応したらいいのかがわからないのだ。
「……ありがとう」
ミアネージュがつぶやくように言い、レグルスから視線をそらした。
その頬がわずかに紅くなる。
「立てるか？」
「あ、うん」
レグルスはミアネージュをそっと地面に下ろすと、大剣を取りだし、その耳もとで囁いた。
「霧の中に何かいる」
「えっ？」
「結界を張ったほうがいい」
「う、うん」
ミアネージュがうなずいたその瞬間。
ドンッ！

大きな音とともに地面がぐらりとゆれた。
原因は、鉄巨人の拳が大地に叩きつけられたことによるものだった。数度にわたる攻撃を受けたことにより、自動的に敵を認識、捕捉し、反撃に出たのだ。
鉄巨人は、背負っていた剛刀を鞘から引き抜き、暴れはじめた。
刀身三メートルはあろうかという化け物のような剣である。あたれば、相手が何であれひとたまりもないだろう。
レグルスは霧の中を透かし見るようにして、声を張り上げた。
「リリカ、鉄巨人から離れるんだ。巻き添えを喰うぞ！」
「ここにいるわよ」
意外なほど近くで声がした。
「あたしがそんなまぬけだと思う？」
ちょっぴり棘（とげ）のある声でリリカが言う。
「無事ならいいさ」
「ふぅ〜ん、すこしは心配してくれたんだ？」
リリカがレグルスのマントの中に手を入れ、その背中をきゅっとつねる。
「うっ!?」
苦痛に顔をゆがめ、レグルスがリリカをふり返ったそのとき。
「ルナリィ？　だめですよ」
いきなりファンネリアの声が霧の中から響いてきた。
「あれ、この声……」
気づいたレグルスがつぶやくと、とつぜん三人の前で突風が巻きおこり、部分的にではあるが霧が晴れた。
「レグルスさん、鉄巨人をおとなしくさせてくださいますか？」
幻想的な霧の中から静かに歩みでてきたのは、やはりファンネリアだった。
「あ、ええと、ミア？」
「うん」
ミアネージュはうなずくと、鉄巨人ジークに思念波で指令をだしてその動きを止めた。
霧の中で巨大な影がわずかに身じろぎし、やがて剣を鞘におさめたときにでる鍔鳴りの音がして静かになった。

「ジーク、戻っていいわ。お疲れさま」
そうミアネージュが告げると、鉄巨人の影は足もとから霧にまぎれるように薄くなり消えていった。
と。
ファンネリアの陰から、真っ白いからだをした大きな獣が姿を見せた。
聖獣ファーナである。
体つきは猫科のそれに似るが、ほっそりとしていて四肢が長い。相貌は犬と猫のほぼ中間といった感じで、ぴんと尖った大きな耳が特徴である。
また、ひときわ目を引くのが額の中央にある真紅の結晶体だ。これは、脳内にある結晶型脳の補助的な役目を果たす、いわば自前の魔法石といえるものだった。
「聖獣ファーナ？」
ミアネージュが驚きの声を上げる。
「はい」
ファンネリアはファーナの頭をやさしく撫でてやりながら、言葉をつづけた。
「でも、この子は、まだほんの子供なんです」
「こんなに大きいのに、子供なの？」
リリカが、信じられないといった顔で聞き返した。
「ええ。いたずら好きなおしゃまさんで、わたくしがちょっとでも目を離すとすぐにどこかに行ってしまって……申しわけありません。びっくりなさったでしょう？」
「いいえ。でも、どうしてファーナの子供が」
ミアネージュがもっともな疑問を口にする。
聖獣ファーナは人見知りがはげしく、誇り高い獣なので、めったなことでは人前に姿を現さない。ましてや、人になれるということなど、まずありえないはずなのだ。
「この子――ルナリィは、いま、わけあってわたくしたち神殿の巫女が、全員で面倒をみているのです」
「わけって？」
「それは……」
リリカの何気ない問いかけに、ファンネリアが一瞬ことばにつまる。

そのようすを目にしたミアネージュがリリカを肘でつついて注意をうながした。
『たぶん、あの子の前では言えないようなことなのよ。さっしてあげなきゃダメでしょ』
『あ……』
言われてリリカは、自分の言葉が思慮をかいたものだったことに気づき、あやまった。
「ごめんなさい。変なこと聞いちゃって」
ファンネリアはかるく首を振って、
『お気遣いありがとうございます、リリカさん』
そう思念波で礼を言うと、くるっときびすを返して、歩きはじめた。
「ついてきてください。このあたりは慣れないと迷いやすいですから。神殿まで、ご案内いたします」

しばらくファンネリアの後についていくと、いきなり霧が晴れ上がり、視界がひらけた。
「あれが、ファーナの神殿か」
レグルスが感慨深げにつぶやいた。
壮麗で威風に満ちた大神殿が、圧倒的な存在感でそこにあった。
「すっごーい！　さすがは十二神殿のひとつってかんじね！」
「こんなに大きかったなんて、思いもしなかったわ」
リリカとミアネージュ、ふたりの口から、はじめて神殿を目にした率直な感想がもれる。
扉のない巨大な門をくぐり、神殿へと続く白亜の列柱――いわゆるコロネードに誘われるようにして、レグルスたちは歩を進めていった。
そのとき。
不意に後ろから声が掛かった。
「誰の許可を得て、この門をくぐったのだ？」
足を止め、全員が振り向いた。
そこにいたのは、鉄巨人にほぼ匹敵するほどの体躯を持った巨大な狼――神狼だった。

「大老！」
ファンネリアが声の主に向かって呼びかけた。
「いつ、お戻りになったのですか？」
「たった今だ」
神狼の射るような炯眼に、さすがのレグルスたちも緊張を覚えないわけにはいかなかった。たんなる魔獣とは比べものにならないほどの圧迫感が、全身から武威となってみなぎっている。
神狼の視線が、ふとレグルスから逸れた。
どうやら、ファンネリアに頭をすりつけて甘えていたルナリィが原因のようだった。神狼は一瞬相好を崩したが、すぐにもとの厳つい貌にもどり、言った。
「やれやれ、困ったものよ。規律を守らねばならぬ立場の我主が、戯れにそのような童子を連れ込んではな」
「たわむれではありません大老。それに、ルナリィは女の子ですよ」
ファンネリアがやんわりと切り返す。
「童女か。どちらにしろわっぱであることに変わりはあるまい」
「おっしゃるとおり、ルナリィはまだ幼年の域をでないファーナです。けれど、自分が将来なさねばならないことはすでに自覚しています」
「まさか、そのわっぱにプリシアの代わりを務めさせるつもりではあるまいな」
「大老、この子は……」
ファンネリアの言葉を遮るように、レグルスが前に出た。
「じゃあ、そろそろ始めようか」
言ってレグルスは零式を取りだし、身構えた。
「ほお、この儂と一戦交えようというのか」
相貌に凄絶な笑みがひろがる。
「いけません！」
ファンネリアが慌てて止めに入った。
「レグルスさんはすでに試練を受け、無事に課題をクリアなさっています」
怪訝そうな表情のレグルスに、ファンネリアは言葉を継いだ。
「神狼である大老を前に、退くことのない気構えをみせるだけでいいのです。ここでは戦う必要はありません」

「神狼の眼光には、見るものを居竦ませ金縛りにする力があるそうよ。それをはねのけるだけの力があれば、ここはパスできるということでしょ」
ミアネージュが言い添えた。
レグルスは銀の鐺のはまった零式の鞘の先端で軽く地面を突き、嘆息した。
「なんか、拍子抜けしちまったな」
「ほんと」
レグルスの隣でリリカが相槌を打つ。
「ならば、余興として戦ってみるか」
本気とも冗談ともつかない口ぶりで神狼が言う。
「ああ、いいぜ」
レグルスは、何のためらいもなく応じると、ふたたび零式を構えた。
にわかに緊迫した空気が場を支配しはじめる。
ミアネージュもリリカもいつものことと黙ってなりゆきを見守っている。最近になってようやくレグルスの性格を理解しはじめたファンネリアも、小さくため息をついただけだった。
「レグルスさん、あまり無茶はしないでくださいね」
「わかってる」
ファンネリアに言葉を返し、レグルスは地を蹴った。
一気に間合いを詰め、そのまま抜刀して神速の剣を見舞う。が、神狼は真横に大きく跳躍してこれを躱し、距離をとった。
その動きを目で追い、レグルスが振り向く。
だが――。
コンマ何秒というわずかな時間のあいだに、神狼の姿は四体に増えていた。
「ちっ、幻影分身か」
「どれが本体か、主にわかるかな」
声に嘲弄するような響きがまじり、四体が一斉に牙を覗かせた。
「ふん」
レグルスは鼻をならして鞘を魔法石の中におさめた。
やや腰を落とし、両手で剣を握り直す。
構えは中段だが、剣先は四体の神狼のどれからも外れている。

ある意味、あらゆる状況に対応できるよう、もっとも自然な構えをとったともいえる。

そこそこ腕の立つものなら、ここで両目を閉じ、心眼で相手を捉えようとするだろう。

だが、レグルスはすでにその域を突き抜けてしまっていた。肉眼でものを見ていながら同時に心眼で事象を捉え、因果律を読むことにより、ごく近い未来なら正確にこれを予知する――そんな能力すら獲得していたのである。

四体の神狼がレグルスを取り囲むように散り、まったくばらばらの間合いで襲いかかってきた。

が、レグルスはまるでその攻撃を読んでいたかのように横様に跳んで躱し、空中で体を捻って剣を一閃させた。

四体の神狼にではなく、何もない虚空に向かって真空波が飛ぶ。

ザンッ！

レグルスが地面に片手をつき、その反動を利用して体勢をととのえたのとほぼ同時に、天の一点で血しぶきが上がった。

「ぬぐっ!?」

くぐもった呻き声が聞こえ、四体の幻影が霧散する。

神狼は落下の途中で姿を現した。右の肩口をかなり深く切られていながらも、残る三本の足で、苦もなく着地してみせる。

「なかなかやるな若いの」

「あんたもな」

レグルスが結界を張ったままその場を動こうとしないのを見て、神狼がにやりと笑う。

「気づいておったか」

言葉とともに、天空から灼熱の光が無数の矢となって飛来し、レグルスのまわりの大地を貫いた。そのうちの数本がレグルスの張った結界に触れて反応、目も眩むほどの強い光を放ち爆発、あるいはそのまま跳ね返され、赫焉の光芒となって消えていった。

「ったく、老獪というか何というか」

「ふん、主とはくぐってきた修羅場の数が二桁はちがうわい」

そんな軽口の応酬をしているうちにも、神狼の肩口の傷が見る間に塞(ふさ)がっていく。

「大老！」

叫んだのはファンネリアだった。

いつになく険(けわ)しい声に、神狼だけではなくレグルスもつられて顔を向ける。

ファンネリアは胸の前で指を組み、結界も張らずに蒼白(そうはく)な顔で立っていた。

はらはらして、これ以上はとても見ていられない――そんな思いがその表情からは容易に読みとれる。

「やれやれ、どうやらここらで終(しま)いにせねばならぬらしい。我らが巫女殿にあのような顔をされたのではな」

神狼の言葉にレグルスは黙ってうなずくと、腕輪の魔法石から鞘(さや)をとりだした。

そして、顔の正面でゆっくりと刀身を滑らせ、鞘内におさめた。

チンッ。

耳に心地よい鍔(つば)鳴りの音が響く。

「あーあ、ファンネリアの前だからって、カッコつけちゃって」

「ぐっ」

ミアネージュに冷やかしの言葉をあびせかけられ、レグルスの頬が染まる。

「でも、戦いぶりはみごとだったわよ」

リリカがウィンクしながら言う。

「とくに、幻影分身が単なるフェイクだって見破ったとこなんかね！」

「そういうリリカはわかっていたのか？」

「もっちろん！」

両手を腰にあて、さも当然といった感じでリリカが答える。

レグルスは零式を左手に下げ、戦いを見守っていたリリカやミアネージュたちのいる列柱のほうへと歩きだした。

「名を聞いておこうか若いの」

背後から声が掛かった。

レグルスが足を止めて神狼をふり返る。

「俺の名は、レグルス。あんたは？」

「風牙王グレートハウリング。武運を祈っておるぞ」

「ありがとう大老。またな」
「おう」
そう声がしたかと思うと、神狼の姿は霧の海にのまれあっという間に見えなくなってしまった。
レグルスの横にならんで立ちながら、ミアネージュが言う。
「風牙王か、ほんとに風みたいなおじいさんだったね」
「まあな」
答えて、踵(きびす)をめぐらし躰の向きを変えたとたん。
「ミャウ！」
「わっ!?」
いきなりルナリィに飛びつかれ、レグルスは仰向けにばったりと倒れた。
いや、倒されたと言うべきか。
子供とはいえ、ファーナはファーナである。レグルスは、自身の三倍はあろうかという、ルナリィの体重を支えきれずにつぶれたのだ。
前足で両肩を押さえつけられるようにのしかかられているので、とにかく身動きがとれない。
「ファンネリア、たのむ、何とかしてくれ」
かなり情けない声で助けをもとめるレグルスに、ファンネリアはくすくすと笑いながら答えた。
「ルナリィならだいじょうぶですわ。ただじゃれついているだけで、噛みついたりはしませんから」
「いや、そうじゃなくて」
相手が子供なので魔法で無理やりはねのけるわけにもいかず、レグルスはとうとう往生した。
「ああ、もう好きにしてくれ」
「ミュウ？」
吸い込まれそうなほど深く澄んだ黒瞳(こくどう)は、聖獣ファーナならではのものだ。そのつぶらな瞳が物問いたげに、レグルスの瞳をのぞき込んでいる。
レグルスはふと思いつき、ものはためしと思念波で呼びかけてみた。
『ルナリィ？』

レグルスの言葉に反応し、ぴくんと耳が動く。
ときに小さな子供は無意識のうちに思念波遮断（マインドブロック）の魔法を発動させ、純粋思念による会話を受けつけないことがある。だが、彼女の場合はとくに問題がないようだった。
『このままじゃ動けないんだ。わるいけど、ちょこっとどいてくれないか？』
『ルナリィが重たいの？』
思念波が返った。
『いや、そうじゃないんだけど』
『じゃあどかない』
『ルナリィ、たのむよ』
『だって、お兄ちゃんのひとみ、青くてとってもきれいなんだもん』
『……』
レグルスは思わず沈黙した。
彼女の好奇心がじゅうぶんに満たされるまで、この状況から逃れる術（すべ）はなさそうだった。
聖獣ファーナの虹彩（こうさい）の色は例外なく黒で、バリエーションはない。
おそらく、漆黒の瞳をしていることが当たり前の彼女には、レグルスのブルーグレーの瞳がめずらしかったのだろう。
紫色の瞳を持つファンネリアも、ルナリィとはじめて出会ったときに、いまのレグルスと似たような状況に陥っただろうことは、想像に難くなかった。
「ミャウゥ」
突然、ルナリィが未練を感じさせるような声で鳴き、ファンネリアをふり返った。
どうやらファンネリアが思念波でルナリィをたしなめてくれたようだ。
わずかに間（ま）をおき、ルナリィがすごすごとレグルスから離れる。
ようやくルナリィから解放され、自由を取り戻したレグルスは、ふうっと息をつき、半身を起こした。
くすっと小さな笑みをもらしながら、ミアネージュが傍（かたわ）らに膝（ひざ）をつく。
「百戦錬磨（ひゃくせんれんま）の神狼を相手に互角の戦いをしておきながら……なってないわよ」
「ちっ、かってに言ってろ！」

「けど、レグルスが刀を取り落とすなんて、めったに見られる光景じゃないことは確かよね」
「リリカまで、そういうこと言うのか？」
「あたしは、ただ客観的な事実を述べただけでしょ」
かるく肩をすくめ、リリカは地面に落ちていた零式を拾おうと手をのばした。
そのとき。
ピシッという音がして、何の前ぶれもなく零式が宙に跳ね上がった。
「えっ？」
リリカがあっけにとられている隙（すき）をつき、ルナリィが空中でそれを受けとめる。
聖獣ファーナは四足歩行を常としているので、人間ほど器用に前足を使うことができない。かわりに、念動を自在に使いこなす力を持っているのだ。
一同、何が起きたのかわからない間に、ルナリィは零式をくわえたまま一目散に神殿のほうへと走り去っていった。
「ああ、俺の零式が！」
気づいたレグルスが叫んだときにはすでに遅かった。
ファンネリアがあわてて後を追う。
「ルナリィ、だめですよ。待ちなさい」
遠ざかっていくファンネリアの後ろ姿を見送りながら、ミアネージュがつぶやいた。
「ファンネリアもけっこう大変なのね」